

■田沢稲舟 小説家。憧れの山田美妙に翻弄され、悲劇的な死に至り、結果として美妙を文壇から追放することに。

たざわいなぶね

佐賀の乱・・・1874＝ 山形県鶴岡で、加賀前田利家一族で出奔した慶次を祖とし、代々藩医の家柄の外科医田沢清の長女に生まれる。母信はキリスト教徒。本名錦。

三つの内乱・1876＝ 2歳：この年、父が家督を相続。祖父伯珉が死去。

西南戦争・・・1877＝ 3歳：妹富が誕生。
裕福な家で、多忙な両親に代わって祖母に育てられ、家事には無能力の一方、生来、躁鬱的で、徂徠学を伝統とする風土のなか、

・・・1880＝ 6歳：鶴岡大火に遭遇、

明治14年政変1881＝ 7歳：女子教育の{明倫校}に入学。友だち付き合いは下手で、絵を描くことに興味を抱く。

岩倉具視没・1883＝ 9歳：再び鶴岡大火に遭遇、
この間、{女学雑誌}を購読し、親友となった進藤孝とともに、ブームの娘義太夫を介して、東京に憧れるようになって、

帝国大学始・1886＝12歳：この年、小学校令が発令されて、{明倫校}が朝?高等尋常小学となる。

国民之友始・1887＝13歳：孝と二人だけ県知事賞を与えられて、朝?小学高等科第一級を卒業。この年、両親が婿にすべく服部正孫を入籍させたことなどから、懊悩が始まり、自閉的性格が強まって行く。

初の対等条約1888＝14歳：三度目の鶴岡大火遭遇。この年、離縁になった服部に代わって、寺岡四郎が入籍。

帝国憲法発布1889＝15歳：高等科を卒業。女性向け文芸誌{以良都女}を熱狂的に読み始め、編集していた山田美妙の名を知る。

帝国議会始・1890＝16歳：稲舟が見向きもしなかったため、寺岡も離縁になる。この頃、家出のように上京し、

大津事件・・・1891＝17歳：*家業継ぐかのように医学校{済生学舎}に入るも適応できず、退学し放浪。尾崎紅葉の{婦女雑誌}に投稿した「初雪」が掲載され、処女作となる。ついに山田美妙を訪ねて師事するも、女にだらしない美妙の本性にも気づかず、この頃から筆力が落ちて行く美妙のかっこうの表向きの相手女性となり、行状が郷里の両親らにも知られ始め、

大本教・・・1892＝18歳：郷里に召還されるが、

郡司千島探検1893＝19歳：再び出奔して美妙のもとに帰るも、再び帰郷させられ、

日清戦争始・1894＝20歳：この年、日清戦争が始まり、父が軍医として広島に出征。*浄瑠璃作品「萩の花妻操の一本」後、美妙のつけた稲舟のペンネーム用い始め、「清少納言名誉唐詩」を発表。

日清戦争終・1895＝21歳：共立女子職業学校図画科に入学を理由に上京すると、創作にのめり込むようになり、「西行廓問答」を皮切りに{文芸倶楽部}に作品を発表し続け、半自伝的「医学修業」、続く同誌の閨秀小説号に際どい描写をもつ「しろばら」で認められるも、郷里では騒ぎとなり、おさえるべく録談も進められるが、迎えにきた美妙と結婚するに至り、合作の「峰の残月」を発表するも好評ではなく、疲労も覚えるようになり、

白馬会・・・1896＝22歳：*美妙は経済的に窮乏し、その母らの扱いにも耐えられず、結婚生活は三か月で破綻、父が引き取りにきて帰郷。結核が判明するとともに、健康悪化が著しくなるなか、嘆きの新体詩「月にうたふさんげの一ふし」などを発表し、狂乱の自伝的作品「鏡乱録」など書き続け、代表作「五大堂」や「唯我独尊」を書き上げたところで、睡眠薬を飲んで重態となるも、父の看病で回復したが、まもなく急性肺炎のため、没した。
遺稿「五大堂」「唯我独尊」が{文芸倶楽部}に載る。なお、当時稲舟の死が美妙を恨んでの自殺ではないかと、美妙に非難が集り、文壇を追放された。